

## — 鐵 鋼 ニ ュ ー ス —

**通産省の技術白書**

通産省は12月19日わが国鉄工業技術の現状と題する技術白書を発表した。白書は戦後10年間の技術の推移をとらえて、わが国の技術は戦後目ざましい発展をとげており、鉄鋼、造船、光学機器、チタン、合成繊維などの部門はほぼ世界水準に達したと述べている。しかし半面技術の発展のほとんど大部分は外国技術の導入によるもので、独自の技術はきわめて少く、その上各産業および各企業の間大きな技術水準の差がみられ跛行的な状態にあるとしている。そして将来の問題に触れ、今後わが国独自の新技术を開拓することが必要であると警告している。いま鉄鋼に関する部分を抄録すると次の通りである。

戦後10年を経過したわが国の鉄鋼業は、鉄鋼輸入国から輸出国にと転じ世界有数の鉄鋼輸出国となるに至った。戦後は復興再建ということが唱えられていたがすでに戦前の水準を超えて新しくその歩を進めており、いまや米、ソ、独、英などの主要製鉄国に伍していく基礎を着々と築きつつある。従来外国技術の摂取のみに頼ってきた技術の面においても今後はわが国に於じた独創的な技術の発達に期待されるとともに、これをささえるために原料、市場などの面における適切な対策が望まれるのである。

次に戦後の鉄鋼業の再建に大きな効果をもたらした設備合理化計画について述べよう。昭和26年に至つてようやく設備近代化問題が検討されるようになり、昭和27年その実施計画の概要が決定した。工事は製鉄、製鋼部門から始まり、この部門は28年度までに殆んど完了を見た。この両部門に投ぜられた資金は全投資の約24%に当り、この中には焼結炉を初めとする事前処理設備、新規設立製鉄所の製鉄工場一式、数基の高炉、コークス炉の復旧工事と、平炉工場の新設、大型酸素発生機が含まれている。しかしながら近代化の最重点がおかれたのは圧延方面であつて、全投資の約50%に相当する560億円が投入され、その主要工事の殆んどが29年中に完成された。戦時における圧延方面の軽視と戦時中の酷使、更に最近20年間の圧延技術の長足の進歩を考慮に入れるとき、原価引下げの最重点をここに指向したことはまことに自然の趨勢である。企業形態から見ると、鉄鋼業は鉄屑依存から脱却して一貫体制の方向に進み、これにつれて企業の系統化が進みつつあることは技術的に見ても望ましいことで、今後この傾向が推し進められるならば、均衡のとれた自由競争による進歩が期待される。特殊鋼業界は現状では未編成の儘であるが、合同体等の組織化により鋼種別専門化により技術の向上を図る必要がある。

戦後10年にして今日日本鉄鋼業は技術的に欧米に比肩しうる段階に立ち至り、昭和27年、29年にはそれぞれ100万tを突破する輸出量を示したが、これは外国技術に負うもので、合理化設備はその殆んどを米、独に仰ぎ生産技術も導入乃至習得によつてなされたものである。今後日本鉄鋼業が発展するためには海外技術との交流を図ることは当然ながら、これとは別に独創的技術の開発に力を致さなければならない。

**八幡洞岡第3高炉改修完成**

7月以来休止していた八幡製鉄所洞岡第3高炉(1000t)は改修工事費5億円で工事を続けていたが、この程完成し12月5日に火入れを行つた。同高炉の改修工事は従来の改修方法と違つた新しい工事方法を採用したため工事期間が1カ月短縮され4ヶ月で終つている。新しい改修工事方法は従来高炉回りの鉄皮の継ぎ合せ修理の際継ぎ合せ鉄皮1枚、1枚をはぎ新しいのに取り替へていたのを、初めから炉回りに合せた継ぎ合せ鉄皮を作り炉体にはめ込み、後に古い鉄皮を取り外す方法である。この炉体鉄皮の修理方法は同所がわが国で初めて試み成功したものである。

**今年度の特殊鋼生産**

特殊鋼倶楽部の調査によると、今春以来内需の漸増と輸出の好調に刺戟されて、特殊鋼圧延鋼材の生産および出荷高は漸次増加をたどり、8月の実績は渇水期にも拘らず生産出荷ともに29,000tを突破し、今年に入つてからの新記録を実現、その後尻上りの好調を続け、この分で行くと年産348,000tはまず間違いなく、1昨年的好況当時の生産規模に近づくものとしている。価格面では原料価格の大巾な騰貴から、さきにt当り5,000円から10,000円の値上げが断行された。

**溶接棒の生産増加**

溶接棒界では、造船ブームの波に乗つて、今年度は年間4万tと戦後最高の生産実績を示すものと見られている。即ち今年初の月2700tを大巾に上回つて現在では4000t以上の生産をあげており、なおこれでも受注しきれない状態にある。これは造船業界の引合増加が一番大きな原因をなしておるが、国鉄関係もやわり買付量を逐次増大しており、その他自動車、機械関係も一率に引合量をふやしてきていることに因るものと見られる。

一方溶接棒各メーカーは今年の初め頃から設備の増加をはかり、受入体制は強化されてきている。八幡製鉄と福知山市溶接棒との会弁で設立された日本溶接棒ではスイスエリコン社製塗装機の本格稼働を開始し、同様神戸鋼製でも従来の塗装機を休止させてエリコン社製塗装機を稼働させており、その他東洋電極、日本油脂など何れも設備強化を行つたことが目立つている。